
その日は・・・。

月原 智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その日は……。

【Nコード】

N0290B

【作者名】

月原 智

【あらすじ】

物心ついたときから、高い塔に閉じ込められている1人の少女の物語……。

第1話

外の世界は、どんな色？

私が知らない外の世界・・・。

目を開けるといつもの世界が始まる。

「朝？」

時間を知ることができるのは、ベッドの隣にあるこの部屋唯一の小窓だけ。

そして、そこから見える景色だけが私が知っている「外の世界」だった。

6畳ぐらいの小さな部屋に、白いシートで覆われたベッドと食事をするための小さな丸いテーブルと椅子が1つずつ・・・。それ以外は何もない・・・。

物心ついた時から、私はここにいます。

晴れていた日もあれば、雨が降っていた日もあった。

それでも私は、ここにいた。何をする訳でもなく。

今日も私は、ここにいます。

今日もまた、私のイツモが始まる。

「ハア・・・。」

深いため息をつきつつ椅子に腰掛けた。

食事はいつだって、気がつけば用意されている。

そして、メニューはいつも、小さなロールパンが2つと小皿に入った野菜サラダが1つ、その横にドレッシングの入った小瓶とスープが1皿置いてあるだけだった。

1日中、小窓から外の景色を見て過ごす私にとっては十分な食事だった。

当然のことながら味ですら、いつも同じ。

けれど、ほんの少しだけドレスシングが甘い気がした・・・。

食事を取り終えた私は、イツモのように小窓へと足を進めた。

外を見ると、久しぶりに雲ひとつない青空が広がっていた。

「きれい・・・。」

ため息混じりにつぶやく。

小窓から見える景色も、いつもたいして変わることはない。

けれど、こんなに綺麗な青空を見るとほんの少しワクワクする。

そんな私の期待が届いたのか、鳥たちが見たことのない花を運んできてくれた。

その日私は、外の世界に恋をした。

第2話

「ハア……。」

カタンという小さな音と共に、スプーンを置いた。

鳥たちが花を運んできてから、もう何日目の朝だろう。

窓辺にずっと置かれていた花は、何日も前に枯れてしまっていた。

「ハア……。」

もう一度、大きく深いため息をついた。

これが本当のたいくつなんだあと、パンをかじりながらふと思った。
最近、あまり食欲がない。

食べかけた物たちをあとにして、少しの希望と共に窓辺へ向かった。

このところ、雨が続けている……。

ボヤつとした暗い空。

カタンッ。

静かな空間に鋭く小さな音が刺さった。

驚いて振り向くと、そこには慌てて食器片付けている、腰の曲がった老婆がいた。

「だれ？」

私が訪ねると、驚いて老婆はその場から飛びのいた。

「気づかれてしまったようだね……。」

蚊の泣くような細い声で、老婆が話し始めた。

「こんにちは、世間知らずのお嬢様。

私はね、この塔の主人に雇われていて、お前さんの身の回りの世話をするように命令されている者さ……。」

外の世界を知らない私にとっての、初めての会話だった。
それにしても、老婆の言っている意味がよくわからない。

「ねえ、ヤトワレテルってなに？オセワってなに？」

外を知ろうと、私は夢中になってたずねた。

「おやまあ。知らなくて当然だけれど・・・あまりに物を知らなさすぎだねえ・・・。」

そう言いつつも、老婆は私の聞くこと全てに答えてくれた。

何時間ぐらい過ぎただろう・・・。

老婆は時計を見ながら私に言った。

「あらまあ。早く帰らないとご主人様に怒られるわ。」

さあ、お話はこれぐらいにしましょう。」

そういつて休めていた手を動かしてテキパキと食器を片付け始めた。

「お願いもつと私に教えて!!」

私は老婆に必死でたのんだ。

すると老婆は一冊の本を取り出して言った。

「後はコレに聞いておくれ・・・。」

そういつて老婆は、あるはずもなかった扉から部屋を出て行った。

いや、最初から扉はこの部屋に存在していた。

そう、それを扉だと認識していなかったただけ。

「あれって開くんじゃあ・・・。」

独り言をつぶやきながら扉へ近づき、老婆がしていたのと同じようにノブを回した・・・。

第3話

ガチャ……。ガチャガチャ……。

扉はいつこうに開かない。

その時、突然話し声が聞こえた。

「あゝあ、鍵閉められちゃったねえ。」

「ってか、扉の存在も知らないなんて変なヤツ。」

どうやら、さっきの老婆が置いていった本のほうから聞こえているみたいだった。

私は、恐る恐る振り返ったするとそこには……。

「な、何なの？」

ビクビクして叫ぶ。

「ハロー俺はタッグ。よろしくご主人。」

と、白い帽子をかぶった変なヤツが言った。

「え?!この変なオンナが新しい主人かよ……。ばあさんも人使いあらいなあ……。」

タッグと名乗った変なの横にいた黒いのが言った。

「変なオンナとは、失礼しちゃう!」

私は反論した。

すると黒いのが言った。

「俺たちのことや扉のことを知らないなんて変なオンナ以外の何者でもないじゃん?」

凶星をつれたが、ひるむつもりはなかった。

「なっつなによ、あんたたちのほうが変じゃない!!髪も長くなければ、目も黒いし……。それに……。」

私が言い終わる前に黒い方が舌打ちした。

「お前、やっぱり変なやつだな……。妖精ってやつは髪がながくねえの!それに、俺たちはオトコなんだから髪はのばさねえの!」
私は何がなんだか解からなくて混乱した。

「妖精ってなに？オトコって？」

黒いのはため息を吐いた。

「ばあさんが、俺らをお前に預けた理由がわかったきがするよ……」

「」

そう言っただけなのは大きな本を取り出した。

「お前文字ぐらいいは読めるよなあ？」

「といって疑わしそくに私を見る。」

反論したいけど、私には反論する言葉すらなかった。

「私、物心ついたときにはここにいて……」

だから、何にも知らない……」

そう言っただけ出てくる涙を手で覆いながら、泣き崩れてしまった。

「おい！泣くことないだろ……。勘弁してくれよ……」

黒い妖精は分が悪そうに、頭をかきながら言った。

「お前がそんなヤツだったって知らなかったんだ……。わ、悪気なんてなかったから……」

それでも私は泣き続けた。

みんなと違う……」

そう考えると、急に胸が苦しくなった。

うまく息が出来ない。

鼓動もだんだん早くなっているのを感じる。

「た……すけ……て……」

声にならない……」

遠くのほうにかすかに声が聞こえる。

遠くの意識の中で私が覚えているのは、白いのと黒いものの必死な叫び声だけ……」

第4話

目覚めたのは、ベッドの上だった・・・。

「おい、お前大丈夫か？」

黒い妖精の声が聞こえた。

ぼおっとした意識の中で、起き上がった。

「ご主人さま、しつかり！」

タツグの声で、完全に目が覚めた。

「頭が、クラクラする・・・。」

こもり気味の声で答える。

「急に倒れたから、びっくりしたけど・・・。お前、カコキユウだったんだな・・・。」

黒い妖精が言った。

「そいつは、やつかいだな・・・。」

タツグの言葉に、うなづく私。

「カコキユウかあ・・・。それじゃあ、いつなるかわかんないから確かにやつかいかも・・・。」

と返す。

「・・・。ちょっと待てよ！お前、何で知ってるんだ？」

そう言われてみれば、そうである。

「何でだろう・・・。」

結局答えは出なかった。

けれど、その日私は、何かとても大切なことを忘れていた気がしてならなかった・・・。

不思議なことは、それから毎日の事として起こるようになった。

私は知らないはずなのに・・・。

知っている。全てを・・・。

ただ、思い出せないのは、名前だけ・・・。

そつえば最近、不思議な夢を見るようになった。

それまでは、夢なんて見たことがなかったのに・・・。
その夢の内容は、いつも決まっていた。

泣き叫ぶ人々。燃え盛る炎・・・。
親を亡くした子供たち。

そして、自分に向けられている、殺意の視線・・・。

その光景が過ぎ去ると、次には少女の叫び声が聞こえてくる。

「お前が“愛”を知ったから、私たちの世界は闇に染まった！お前
なんか、お前なんか消えてしまえ！！」

そして、いつもそこで目覚めるのだった・・・。

第5話

考えてみると、不思議なことは、まだまだ沢山あった。
その中でも、一番の不思議は黒い妖精の名前を私が知っていたことだった。

聞いたこと無かったのに、私は知っていた……。

それはある日の午後だった。

私たちは、いつものように世の中についての勉強をしていた。

「だから、俺たちは【妖精】ってよばれる【生き物】で、お前は【人】って呼ばれる【生き物】なんだ。」

「なるほどねえ……。けど、名前が付いてても、生き物じゃない物だつてあるのよね。はあ、難しい……。」

私は鉛筆を置いて手を前に思い切り伸ばした。

「うわあああああ!!」

黒い妖精が、急に迫ってきた私の手のひらのせいで慌ててしまい椅子から落ちてしまった。

「ゴメン、グート。大丈夫??」

私の言葉に、その場にいたみんなが目を丸くした。

そして、グートが言った。

「お前、なんで俺の名前知ってるんだ??」

「そ、そんなこと、私にはわからないわ……。」

それだけ言うと、私は意識を失った。

その日私は、自分が自分じゃなくなった気がした……。

薄い意識の中で、私は夢を見た……。

泣き叫ぶ人々。燃え盛る炎……。

親を亡くした子供たち。

そして、自分に向けられている、殺意の視線……。

その光景が過ぎ去ると、次には少女の叫び声が聞こえてくる。

「お前が“愛”を知ったから、私たちの世界は闇に染まった！お前なんか、お前なんか消えてしまえ！！」

そして、いつもそこで目覚めるのだった・・・。

そう、いつも見るアノ夢だった。

けれど、いつもと少しだけ違っていた。

この夢には、続きがあった・・・。

少女は叫び終えると、駆けて行った。

燃え盛る火が取り囲む、家の中へ・・・。

そして・・・。

両親だろうと思われる【人だった】者の首を大事そうに抱えて帰ってきた。

「これは私の両親・・・。大切な人たちだったのに、あなたが全部壊した・・・。」

いつのまにか傍観者だったはずの私は、夢の中でリアルになっていた。

そして、一転を指差した少女の指は間違いなく私に向けられていた・・・。

少女は叫んだ。

「不幸の女神アリシア！お前なんか、滅んでしまえ！！」

第6話

目覚めたのは、真夜中だった・・・。

タッグもグートもベッドの横で、すやすやと眠っていた。

夢の内容が反復するように、いつたりきたりと心を揺らしていた・・・。

「私は・・・。誰・・・？」

次から次へと、涙が頬を伝った。

月の光に照らされて、涙がキラキラと光る。

青く・・・。黄色く・・・。赤く・・・。

「赤・・・。」

赤色と、炎が重なり合って、あの時の少女の言葉がよみがえる。

「不幸の女神・・・アリシア・・・。わ、私が・・・アリシア・・・？」

“アリシア”

その言葉を口にする、と、老婆からもらったあの本が光りはじめた。

怖々ながら、手を伸ばす・・・。

胸騒ぎがした。

「手に取れば引き返せないよ。」

それは、グートの声だった。

「夢を見たんだろ？アノときの、お前が村を自らの手で焼き払った、アノときの夢を・・・。」

「わ、私が・・・アリシアなの・・・？」

グートは何を言わずに、首を縦に振った。

「どうして・・・。」

「それは、アリシア・・・。お前が一番よく知ってるはずだ。」

グートにそう言われ、一度心を落ち着けてみる。

「思い出してみる・・・。」

私はゆっくりと目を閉じた・・・。

30分・・・。

1時間・・・。

そして、夜明け・・・。

「やっぱり、解からないわ・・・。」

「そうか・・・。仕方ないな。」

「教えてはくれないの？」

必死の問いかけに、顔をそむけるグート。

「教えては・・・くれないのね・・・。」

「俺が・・・俺が話すことは出来ないんだ・・・。お願いだから思い出してくれ！そして・・・。」

「俺にかけられた呪いを解いてくれ？」

わって入ったのはタツグの声だった。

「寝たふりか・・・？」

鋭くグートがタツグを睨みつけた。

「おおっと、怒らないでくれよ。あまりにも二人だけで話を進めるもんだから、はいれなかつたんだ・・・。それはそうと、徐々に目覚められているんですね、アリシア様。」

タツグはフワツと手元に飛んできて、手の甲にキスをした。

「どういうこと？」

タツグは顔を上げ、私の瞳を見つめながら言った。

「そのことについても、我々の口から申すことは出来ません。アリシア様がご自分で記憶を取り戻すほかに道はないのです・・・。」

それだけを言い残し、窓から飛び去っていった。

声をかけることなんて、出来るわけがなかった・・・。振り返ってグートを問い詰めた。

「タツグはどこへ行ったの？」

「アリシア様のことをご報告に・・・。」

「どこへ？」

「言えるわけがございません・・・。」

「あなたは、どうするの？」

グートは、ただただ首を横に振った。

「ただ言えることは……。ここには長くいられないでしょう……。」

グートもタツグ同様に、それだけ言い残すと窓から飛び去っていった。

「私は……。私は、【私】を探さないと……。」

私はアノ本を取りすみずみまで読み始めた……。

その日私は、自分探しをはじめた……。

第7話

「不幸の魔女・・・？」

そこで、私ページをめくる手が止まった。

アリシア・・・。

「これは、私のこと・・・？」

恐る恐る読んでいった。

それは、悲しく・・・。

心が引き裂かれるような、話だった・・・。

【不幸の魔女】

むかしむかし・・・。

それはまだ、魔女と人と同じ村で、同じように生活していた頃の話。

生活は違えど、お互いを尊重し仲良く暮らしていた。

人が困っていれば、魔女が助け、又魔女が困っていれば、人々が助けとなった。

魔女達のなかでも、とりわけ美しく村の人々からの信頼も厚い魔女がいた。

それが、森に住む魔女アリシアだった。

あるとき、アリシアの元へ1人の男が尋ねてきた。

男の名前はポット・タット。

この村では、かなり有名なドジな魔法使いだった。

彼がここに来たのは、他でもない。

アリシアに魔法を習いにきたのだった・・・。

ポット・タットはアリシアの家の玄関につくと、戸口の前でノックもせずにかきました。

「魔法使いの私が言うのもなんですが、魔法を教えてくださいたくない

でしょうか？」

もちろん心の優しいアリシアは、素直にポット・タットを家にあげました。

ポット・タットが来てから、アリシアの生活は前以上に明るいものになりました。

ポット・タットともすぐに打ち解け、毎日少しずつ魔法の練習をするようになりました。

初めのうちは、やっぱりドジな魔法使いといわれてるだけあって、ドアを吹っ飛ばしたりガラスを全部割ったり、アリシアの家がボロボロになるほどでした。

けれど、心優しいアリシアは怒るなんてことはしませんでした。

「私も、おばあ様に習いたてのころはこうだったのよ。」

そう言って、ポット・タットを慰めました。

けれど、幸せも明るい生活も新しく即位した国王によって壊されるのでした……。

運命の日は突然に、二人の上に無情にも降りかかりました……。

第8話

ある日、ポット・タットに手紙が届きました。

【王室付きの魔法使いを雇いたい。明後日までに返事を返すように】
という内容と、ビックリするぐらいの謝礼金が書かれていました。
普通の人ならすぐにでも飛びつきそうな内容でした。

けれど、ポット・タットは悩みました。

まだ、アリシアに弟子入りしてから1ヶ月……。

かといって、もともと使えていた、もとい成功していた魔法とは別にアリシアに教えてもらいながら習得できた魔法は、いっしょか数え切れないものになり、普通なら一人前といわれる魔法使いよりも、魔法が使えるようになっていました。

しかし、ポット・タットはアリシアと一緒にい続けることを願って
いました。

そう、恋をしたから……。

実はポット・タットの気持ち、アリシアは知っていました。

そして、アリシア自身も少しずつポット・タットに惹かれていました。

二人の間の距離が、目に見えてハッキリと見えるようになった矢先の王室からの手紙……。

二人は食事を取らずに悩みました。

【離れたくない】

素直に言葉は出なくても、二人の心は同じでした。

「ねえ、タット……。」

先に沈黙を破ったのはアリシアでした。

「私は、今までずっと一人ぼっちだった……。けれど、あなたが来てくれたおかげで、私の生活は変わったの……。でも……。」
アリシアは、涙ながらにポット・タットに別れを告げる決意をしま

した。

「でも、こうしてあなたの魔法が国王様に認められた。これはとても素晴らしいことだと思うの。だから……。」

それ以上の言葉を、アリシアは言うことができなかった。

できるはずがなかった。

ハッキリと「さよなら。」なんて……。

ポット・タットは首をうな垂れたまま、アリシアの話を聞いていた。した。

言葉が涙に変わるまで……。

そして、ポット・タットも話し始めました。

「君の言いたいことは、わかってるんだ……。国王の、王室付きの魔法使いになれば、今まで俺をバカにしていた魔法使いたちにも顔が上げられるようになる。」

ポット・タットはゆっくりと顔をあげました。

「けど、俺は……。俺は、君と離れるなんて考えたくない。アリシア、君のことが好きなんだ。」

ポット・タットの気持ちを受け入れたい。

それがアリシアの素直な心でした。

けれど、アリシアは心を殺して言いました。

「タット……。気持ちは嬉しいわ……。けれど、それはせつかくのチャンス逃してまで、手に入れなければいけない幸せかしら……。チャンスを希望に変えてからでも、遅くないんじゃないかしら……。」

そして涙を拭いて言いました。

「ここからお城までは、筈で半日もかからないわ。明日の朝でかければ十分間に合うはず……。さあ、タット。お城へ行く準備をしましょう！」

ポット・タットは何も言わず、アリシアに従った。

そして翌朝……。

ポット・タットは朝日を見る前に、アリシアの家から姿を消した・・。

「さよなら」も言わずに、姿を消した・・・。

けれど、個室の窓からアリシアは見ていた。

ポット・タットの背中を・・・。

見送った。

涙とともに・・・。

「ポット・タット・・・。今までも、これからも、私が愛した唯一の人・・・。」

第9話

不幸が訪れたのは、それから間もなくのことでした。

もともと、魔法使いが嫌いだった国王は、何かにつけてポット・タットに罰を与えました。

けれども、ポット・タットはめげずに仕事に励みました。

しかし、とうとう国王の策略にはめられてしまいました。

それはポット・タットがお城に来てから、半月もたたないある日の事でした……。

朝、ポット・タットは、いつものように国王の着替えを手伝っていました。

すると突然、国王が言いました。

「ポット・タットよ。お前はここ数日、わしの八つ当たりにもめげずによくぞ働いてくれた。わしはお前に褒美をやりたいと思う。今から言う場所に行って取ってきてはくれぬか？」

これこそが、国王の最大の策略だった……。

ポット・タットが王室から出て行くと、王様はすぐに家来に言いました。

「わしの大事な壺を盗もうとしている輩があると聞いた。今、わしの寝室にどうやらいるらしいのだ。いつて捕らえて来い！」

そうです。ポット・タットは王様にだまされてしまったのです。もちろん、ポット・タットは捕らえられてしまいました。

「王様、これはどういうことでしょうか……。王様は私に取ってくるようにと申されたのに……。」

「なっ何を言うか！この泥棒め！！こんなヤツはさつさと死刑にしてください！」

とうとうポット・タットは王様の罠にはまってしまいました……。

朝、広場の前には多くの村人が集まっていた。
ある一人の魔法使いの処刑をみるために。
ソレは、もちろんアリシアの耳にも届き、アリシアは急いで広場へと向かった。

人ごみの遠くに、処刑台が見えた。
やせ細った一人の男と、兵士が2人。
そして、裁判長と王様が立っていた。
裁判長が長々と罪状を読み上げる。

それは、悲しみにくれるアリシアの耳には届くわけがなかった・・・。

涙の遠くに、ポット・タットの視線を探す。

「タット!!」

ついにアリシアは叫んでしまった。

広場が騒然となる。

人目を気にせずに、アリシアは王様に告げた。

「王様！私はこのポット・タットを愛しております！どうか、最後の別れの時間を・・・。」

アリシアの想いは言葉にならなくても、涙が語っていた。

「よかるう！ただし、5分だけじゃぞ。」

アリシアは急いで処刑台の階段を駆け上がった。

「タット・・・。どうしてこんなことに・・・。」

泣き崩れるアリシア。

鎖に繋がれたまま、涙を落とすポット・タット。

そして広場までもが、泣き出した・・・。

「5分だ!!」

悲しみを裂くように、王様の声が響いた。

引き離される二人の心。

泣き叫ぶアリシアの目の前で、運命の刃は残酷にも振り下ろされた・

•
•
o

第10話

ポット・タット処刑から2週間・・・。

アリシアは空白の時間を生きていた。

浮かんでは消える、あの日の風景。

涙が枯れるまで泣き続け、王を憎み続けた・・・。

許せるわけがなかった。

必死に感情を殺そうとしてみた。

けれど、愛がなくなつたアリシアには抑えきることが出来なかった。

そしてその日の午後、今になつても思い出すのを恐れるくらい怖い惨劇が血の雨とともに始まつてしまつた・・・。

正午の鐘が鳴り響いた。

それと同時に、雨が降つた・・・。

それは、アリシアが降らせた血の雨。

王様の、そして家来達の。

アリシアの暴走は、止まらなかつた・・・。

優しかったアリシアは今ももう、どこにもいなかった。

城に火を放ち、民家までをも焼き払つた。

冷たくなつた瞳に涙を浮かべても、悲しみは、怒りは止まらなかつた・・・。

そして、多くの人々が死んだ。

魔法使いも、たくさん死んでいった・・・。

それでも、アリシアは止まらなかつた。

同じ頃、森の中で二人の妖精が誕生した。

それは、ポット・タットが最後に残した魔法。

寂しさにアリシアがつぶされてしまわないようにと・・・。

2匹はすぐにアリシアの元に飛んでいった。

けれど、そのときにはすでに遅かった。

火の海のなかにたたずむアリシア。

恐怖と恐れのまなざしでアリシアをみつめる人々。

グートがすぐにアリシアの記憶を奪い去った。

次の瞬間、恐怖の魔女アリシアは幼き少女へと替わった・・・。

「村の者達・・・。止まるのが遅くなつてすまなかった。けれど、わかつてほしいんだ！アリシアだって、こんなことしたくてしたんじゃない！！愛するものを亡くしたせいで、力をコントロールできなくなつてしまったんだ・・・。」

しかし、いくら謝つたところで村人達の怒りは収まらなかった。

「村の人々まで、殺さなくても良かったじゃないか！！」

「そうだ！それに、いくら謝られても殺された者たちは帰つては来ない！！」

怒りは野次にかわり、中には石などを投げつけるものたちまで出てきた。

今にもアリシアを殺そうと襲い掛かつてくるものも出てきた。

「グート1人では、ダメだったか・・・。」

そういうと、タッグは物陰から出てきて叫んだ。

「人々は、生きている！！」

第11話

人々は一気に止まった。

「どういうことだ？」

「アリシアの……。優しくったときの記憶が、全ての傷ついた村人を癒すんだ。だから、アリシアを許して欲しい……。」

「そんなの、虫が良すぎる！！それに、アリシアの記憶が戻らないって保障もないだろ！」

野次は一層大きくなった。

「それならば、アリシアの記憶が戻ったなら……。もし、戻ってしまったなら今度は好きにすればいい！！」

その条件以外に、村人を静める方法はなかった……。

タッグの目にも、グートの目にも涙がたまっていた。

「しかし……。記憶が戻ってしまったら、お前達がどこかへ逃がしてしまうんじゃないか？」

この言葉に、妖精たちは戸惑った。

反論できなかったのだ。

もし記憶が戻ってしまったなら、そうするつもりだったから……。「やっぱり、逃がすんだな！それならば、生かしてはおけない！！」

村人達は、今にもアリシアに襲いかかるうとした。

そのときだった。

一筋の光が、グートの胸を貫いたのは……。

グートの体は中に浮かび上がった。

そして、妖精から人へと姿を変えた。

「村のものよ、聞いてくれ……。」

そこに現れたのは、処刑されたはずのポット・タットだった。

「私は、このアリシアを心から愛していた。しかし、私はアリシアに貰った愛を返す前に王に殺されてしまった……。私は、アリシ

アに恩返しすらも、出来ぬままだった。だから、どうしても恩を返したい……。それを解かって欲しいのだ。記憶を抜き去れば、大丈夫だろう……。しかし、村のものが言ったとおりいつ記憶が戻ったもおかしくはない。だから、皆が見張れる場所にアリシアを閉じ込めてくれ。そこには、もちろんこの妖精たちと一緒に……。

しかし、妖精たちだけでは、アリシアの記憶が戻ったときに逃がそうとするかも知れぬ。だから、村人の中からも監視役を出入りさせよう。それでは、いけないだろうか……。

村人の中には、涙を流しながらポット・タットの話聞くものもいた。

「それでも不安だというのなら、この妖精に術をかけておく。もしアリシアを逃がそうとしたら、村のものにそれが伝わるように……。」

「どういうことだ？」

話に聞き入っていた男が言った。

「もしも、アリシアが記憶を取り戻し始めたら、この村に夜を。完全に取り戻したら、朝を持ってこさせる。」

「けれど、完全な記憶を取り戻したアリシアに、我々村人が敵うわけが……。」

「俺は、アリシアの憎しみの心を妖精に封じさせようと思う……。だから、目覚めてもアリシアの心に憎しみはない。そのときは、アリシアに聞いてやってくれないだろうか？ どう生きていくのか……。それとも、処刑されるのか……。」

彼女の記憶で癒された村人達は、すぐさまアリシアだった少女を村はずれの森にある高い塔の上に閉じ込めた……。

それは、以前アリシアが住んでいたところでもあった。

こうして、1人の少女は高い塔の上に閉じ込められた。
自由と記憶とを、取り除かれて……。

少女がいつ目を開けるのかも、いつ自分のことに気づくのかも、それは誰にもわからないことだった。

もしも、記憶を取り戻したとき、彼女が選ぶのは・・・？

冷たい視線の中で生きる【生】か・・・。
悲しみの果ての【死】か・・・。

それすらも、誰にもわからないことだった。

最終話

心が、ここまで苦しくなったことなんてなかった……。続きを読もうとしても、涙で読むことができなかった。

独りだった、アリシア。

愛を知った、アリシア。

愛するものを失った、アリシア。

孤独を閉じ込めて、闇に飲まれたアリシア……。

記憶がよみがえる。

薄っすらと……。次第に、ハッキリと……。
「痛っ……。」

次の瞬間、胸に激痛が走った。

呼吸が苦しくなる。

意識が朦朧とする中で、記憶が意識を消そうと押し寄せてくるのがわかる。

【アリシア】に変わろうとする……。

感情が溢れでる。

そして、【私】は眠った……。

目覚めたら、アリシアだった……。

ここは、見慣れた場所。

私がいた場所は、私の城だった。

人々は、力のコントロールがきかなくなった私を、村の住人達がココに閉じ込めた。

タツグとグートは、私の見張り。

記憶を取り戻したときの、見張り。

それは、ポット・タットの残した、最後の魔法。

私が記憶を取り戻さないように、分身にたくした最後の魔法……。

そして、あの老婆は村の希望。

私のはやく記憶を取り戻すための魔法。

こうして、明けなかつた夜に朝がきた……。

そして約束どおり、村に朝が訪れた。

服装を整えて、【私】を振り返った……。

色々な光景が浮かんでは消え、また浮かんでは消えていった。

そして、村の鐘が鳴った……。

部屋の扉がたたかれる。

私は覚悟を決めて扉を開いた……。

無言のままつれられて、私はあの日の広場へと向かった。

人々は、不安交じりの瞳で私を見ていた。

一つずつ、階段を上る……。

かつてポット・タットがそうしたように。

私が処刑台の横の椅子に座ると、裁判長が叫んだ。

「罪人、アリシア！これより、お前の公開処刑を行う。異存はないな？」

私は、ただ一点を見つめていた。

何も語ろうとは、思わなかった・・・。

村の人々からは、不安の声が漏れていた。

「約束では、アリシアに聞くんじゃなかったのか？」

「アリシアが、もう答えをだしたのでは？」

「けれど、もう一度確認しなくていいのだろうか・・・。」

次から次へと、村人は言葉を連ねた。

ザワつきを抑えるかのように、裁判長が叫んだ。

「アリシアよ！返事をせぬか！！」

私は、スツと立ち上がると処刑台へと向かった。

そして、言った。

「この白装束は、私の家に代々伝わる死に装束・・・。私の答えは、最初から決まっております。たとえ、村の人々に許しを与えられても、私の心は一生埋まることがないでしょう・・・。愛するものを失った今、私は生きる意味を無くしてしまいました。どうぞ、みな気のすむように処刑してくださいませ。そのほうが、不安にも怯えることなく暮らせるでしょう・・・。」

凜とした姿で、言えただろうか。

それはもう、私には解からない・・・。

「いいのだな？」

裁判長の確認に、私は静かにうなずいた。

「最後に言いたいことはないか？」

私は、首を振ろうとして考えた・・・。

そして、自分なりの答えを出した。

「私が死んだら、私の体を灰になるまで燃やしてください。魔女は、肉体があれば生まれ変わってしまいますから・・・。」

「よかるう・・・。」

裁判長の言葉に、私は安堵して目を閉じた・・・。

アリシアの遺体は、最後の言葉通り灰になるまで焼き尽くされた。彼女が亡くなった場所には、花が植えられ、そしてその花は血のように赤い花を咲かせた。

まるで、アリシアの恋と死に様を語るかのように・・・。

ある日、アリシアの墓に1人の男が現れた。

男の両肩には、妖精が座っていた。

いや、その妖精は眠っていた・・・。

男はアリシアの墓に花を生けると、光になって消えていった。

男の名前は、誰も知らない・・・。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0290b/>

その日私は・・・。

2010年12月5日05時32分発行